

サンプル問題

前期日程

小論文

多文化社会学部

注意事項

- 一、試験開始後、問題冊子及び解答用紙（その1と3）のページを確かめ、落丁、乱丁あるいは印刷が不鮮明なものがあれば新しいものと交換するので挙手すること。
- 二、試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
- 三、下書き用紙による解答提出は認めない。
- 四、解答する文字、数字、記号などは明瞭に書くこと。
- 五、解答用紙の所定の欄（2カ所）に受験番号を確実に記入すること。
- 六、解答用紙は持ち出さないこと。

問題

人種差別を扱った以下の文章①、②の内容を踏まえ、次の(1) (2)のそれぞれに答えなさい。

(1) 文章②中の「二重の差別意識」(12・16ページ)の根底には、どのような問題があるか。「二重の差別意識」が指すものを明示した上で、文章①の内容を踏まえつつ論じなさい。(四〇〇字以内)

(2) 人種差別問題の解決を難しくしている要因は何か。その要因が関わる人種差別以外の例をあげ、人種差別問題との共通点と相違点を明示した上で、文章①の要点に触れながら、自分の考えをまとめて論じなさい。(八〇〇字以内)

文章① 人種差別主義者の言説

アルベール・メンジ (注1)

この問題には、悲劇的な面以外に、どこか人を驚かす、逆説的な側面がある。誰も、というかほとんど誰も人種差別主義者になりたくはない。それなのに、現に人種差別的言説は今も根強くある。直接問いただせば、人種差別主義者はそれを否定し、卒倒しかねない。自分が人種差別主義者だなんて、絶対にそんなことはない！ しつこく迫れば、彼を侮辱することになる。しかし人種差別主義者が存在しなくても、人種差別的態度、行動は存在する。誰でもその例をあげることができる……ただし、自分ではない誰か他人の内にあるが。人種差別主義者の発言は退屈で時代遅れと見えて当然のはずだ。あらゆる分野の専門家たちが、幾度となく繰り返し反駁はんぱくをした。その反駁は決定的に理解されてしかるべきだったし、人種差別主義者も納得してしかるべきだった。しかし彼らは相変わらず発言を繰り返し続け、まるでどんな論証にも影響されないかのようだ。正確には一体何が語られ、誰のことが語られているのだろう。こうした矛盾や他人に耳を貸さない状態もまた説明されなければならない。

さしあたり、人種差別主義者の発言がまだ続いている以上、個人的・集団的な体験・行動の現象分析を試みる前に、再度彼の言葉を思い出し、再度反駁しておこう。人種差別主義者の言うことがたわごとであれ、真実であれ、また、その行動が突飛なものであれ、習慣的なものであれ、彼の言葉にきちんと耳を貸すべきである。なぜなら、告発をし、殴りかかってくるのは彼なのだから。次に、たとえこの言説が理不尽なものであっても、その真意を読み解くようにしよう。この言説はその対象よりもそれを発言する者についてより多く教えてくれるかもしれない。この問題はまさにそういうケースであると思われる。

人種差別主義者は、あるいは彼自身否定しているその投影された影は、何を言っているのか。

彼らの言説が一貫性だけでなく体系さえ求めている点にまず注意しよう。そして、面白いことに、少なくともこの点にかんしては、説得性があるように見える。なぜなら、彼らの発言の後に従って、人々は、人種差別的理論が存在すると、繰り返し述べているからだ。断片的なものにせよ、大部にわたるものにせよ、われわれが参照できる多くの文献には、人種差別主義者の自信と野心、喜んで彼らに従うつもりでの迎合的な読者に、一つの真理を与えてやるのだ、という彼らの確信が確認できる。思想家とも専門家とも

言えないごく普通の人種差別主義者さえ、無関心な人間はもちろん、反人種差別主義者よりも、関係資料に熟知しているようだ。彼はこの問題に関心が深く、偏執狂とさえ言えるほどだからだ。サロンや街で、バスの中や職場で、耳を傾けてくれる人がいたら、誰にでもこの話をする。他人に同意してもらって安心しようと努めたり、逆にまた、反論させておいて、それに勝ち誇るように答えたりする。書物やニュースを基にして、皆を教育するため、進んで情報を流す。ついには悦に入って、人間性や文明の将来にかんする一般論にまで脱線する。こうして、科学的理論とまでは言わないが、一種の人種差別主義哲学が誕生する。ただし、哲学という語を、物事にかんする新秩序を推進するために人々に影響を与えようとする、全般的な物の見方および説得の意志、と拡大解釈することに同意しての話であるが。

この哲学とはどんなものだろう。何を証明し、何に到達しようとしているのか。あまりにも個別的な指摘、流派間の違い、作家の無意識的な癖を捨象するなら、この哲学は、左のように要約可能な、三系列の論に依拠している。

純粋な人種、それゆえ他の人種とは区別された人種が存在する。だから、各集団間、集団を構成する個人間に、重要な生物学的差異が存在する。

純血種は生物学的に他の人種に優越する。この優越性は同時に、心理的、社会的、文化的、精神的優越性という形を取って現れる。

この多種類の優越性は優越集団の支配と特権を説明し、正当化する。

さて、これをちよつと検討しただけでも目につくのは、個々の命題の脆弱さであり、命題の繋ぎの部分の弱さであり、結論の不当さである。

そもそも「人」種という用語自体がわれわれを当惑させる。歴史的に言って、これは生産性向上の技術的関心から生まれた畜産用語である。さらに、ダーウインはここから出発し、人工淘汰から彼の自然淘汰論を想定している。「血統の」純粋さとは畜産業者のこうした計画から生まれた約束事である。獣医学の現場では、もちろん絶対的純血が大切なのではなく、また、過去に戻る事が大切なでもない。——一体そんなことをしてどこに行こうというのか——。そうではなく、逆に、未来に向かつての純化、ある選択の強化が大切なのだ。「純血」種は定められた仕事をより良く成し遂げるよう、人間が定めた人工的血統である。これは厳密に生物学的純粋さではなく、それぞれの仕事

に応じてさまざまである。馬の最良「種」とは、時には競走に一番適したものであり、時には耕作に一番適したものである。生理学的には全然似ていないが、ペルシユロン馬（注2）と「サラブレッド」は両方ともその機能上最良である。人間に当てはめてみると、これらが何を意味するのか、たちまちわからなくなる。王族間の近親相姦（そうかん）のようなごく稀な場合を除いて、こうした淘汰の意志はかつて存在したことがなかった。これまで、誰一人、群衆を改造しようとする主張した者はいなかった。いずれにせよ、こうした淘汰はいまだかつて、偶然にさえ、実現したことはなかった。どれほど孤立していても、よそ者からまったく何も受け取らなかったような集団など、まずは知られていない。生き残りの必要性、戦争の当然の結果が、人類にたえざる混交を余儀なくさせた。だから、人間集団は固定するどころか、変化することを決してやめなかった。族内婚を求めた王侯貴族として、雑種化を免れることはできなかった。厳しく監視されたハーレムもこの運命をのがれることはできなかった。これは今や周知の事実である。純血性がある一部の人間の間で重んじられてきたとしても、いずれにせよ、それは人類にとって普通の事柄ではない。実際、化学を別にすれば、純粋とは隠喩であり、願望であり、あるいは幻想である。そこでは完全さへの要請が他のすべてを巻き込む。

では人間は生物学的に異なっていないのだろうか。もちろん異なっている。人種差別主義者の支持者は自分たちの立場を補強しうるあらゆる科学的新事実を情熱的に追い求め続ける。だがしかし、この領域ではすべてが言い尽くされているように思える。現在、右翼人種差別運動の復活が語られている。この「新」右翼で目につくことは、彼らの独自性ではなく、そのほこりまみれの古臭さだ。真実は比較的単純なものである。純血人種は存在しない、しかし人間には差異がある、ということだ。

こうした差異の証明に議論は必要ではない。街に出れば差異は十分に示される。デパートや地下鉄では、金髪、黒髪、赤毛、中間色、黄ばんだ毛、赤ちやけた毛が一緒くたに見かけられる。目は青色、栗色、緑色、淡褐色だ。髪、鼻、唇……だが、こうして数え上げることが、同一都市の中でさえ、何か役に立つことなのだろうか。ましてや、大陸の外には出ないとしても、ヨーロッパ全体となるとどうだろう。また、同時に見て取れることだが、仮にある一つのタイプを切り離せると仮定しても、この同じタイプに属する人々が、他と区別された、ある特定の社会集団を構成することなどまったくない。個々の生物学的特徴は国民、民族、階級の間偶然に任せて配分される。したがって、同一集団内でも、また集団間でも、たしかに割合こそ違いますが、多様な人間のタイプが見出される。より正確に言うなら、同一の諸特徴が多様な仕方で組み合わせられているのだ。したがってまた、人間が、実際、互いに異なった存在であるとしても、どんな集団もある特定の組み合わせを独占的に要求することはできない。

このことは、場所による支配的な組み合わせがない、という意味ではない。ただ、この支配的な組み合わせは相対的だ、ということである。ヨーロッパ人と比較して、アフリカ人は全体的に髪、肌、目の色が暗い。だが近くから見れば、ヨーロッパ人、アフリカ人の間にも、多様性がふたたび現れてくる。ヨーロッパ人の中でも南の人間は、北の人間に比べて、総じて肌の色が濃い。しかし、プロヴァンス地方の人々の内にもなんという多様性が見られることだろう。もしアフリカ大陸を駆け巡るなら、途方もなく豊かな——しかも単に「黒人」だけとは言えない——色の帯の中を横切ることになる。ほとんど白人に近いアフリカ人から真っ黒のアフリカ人の間には、あらゆるレベルの中間状態が存在する。チュニジアやモロッコの市場のぼつたりした色白の小売り商人から、小柄なピグミー族を経て、煤のように黒くほつそりした長身のケニアのマサイ族にまで至るのだ。

また、スペクトル効果とでも呼べるものも存在している。緯度が変わると、ある特徴が色濃く現れる傾向がある。だが、完全な断絶は決してない。スペクトルのように、ある集団から他の集団へと、あらゆるぼかし、あらゆるニュアンスを経めぐることになる。時には、断絶がより鮮明に見えることもある。パリのどこかのホールに、ユダヤ人、マダガスカル人、コルシカ人、あるいはロシア人が大勢集まった場合、それが何人か見分けがつくように思える。だが何が見分けられるのか。ユダヤ人種だろうか。北アフリカ、コルシカあるいはロシア人種だろうか。あるいはただ単に、他のフランス人集団との相対的差異が集合的に強調されている民族的存在であるか。衣服、話し方、物腰その他の相違——の集中化現象であろうか。ブルターニュ人、アルザス人、プロヴァンス人が集まれば同じ印象を与えるだろう。このような際には、ブルターニュ人種、アルザス人種、あるいはプロヴァンス人種とでも言うべきなのだろうか。そして、これらの場合にも、もつと近くから見れば、たとえばユダヤ人群衆の中にも、ありとあらゆる可能な多様性が見出されるのだ。ヨーロッパ各地の出身者、マダガスカル人、東洋人等々。そしてもし個々の範疇を別々に検討するなら、ここにもまた、同じような複雑さが発見される。繰り返して言うが、要するに、ある社会的集団とある生物学的相貌を一致させることは不可能だ。多様性と変異が存在するのに、「アラブ人」「中国人」「アメリカ人」とわれわれが一括して捉えるのは、敵意や不安の念のこもったわれわれの怠慢さからであり、また、しばしば距離が生む知的視野の狭さからである。「私たちとは違う」「私たちのところとは違う」と、彼らの特徴づけているだけのことなのだ。つまりわれわれを基準にし、彼ら固有の存在は無視するのである。

附言するなら、以上のことは、文化的共同体が存在しないという意味ではない。ただ、各共同体の内部においても、また共同体間においても、ごく一般的に、同じスペクトル効果が見出される。この点についてはまた後で触れることにしよう。いずれにせよ、歴史と社会学は、単純化を目指すどんな生物学をも否定する。……中略……

少し以前から、人種差別主義者は最近の発見に頼みの綱が求められると思いはじめた。人間の血液を分析すれば否定しがたい差異が明らかになる、と言うわけだ。しかしこの方法だと個人のレベルにまで行きついてしまい、話がまったく変わってしまう。人種差別主義的「理論」は、逆に、さらに後退を余儀なくされるようだ。この新しい血液証明書は、指紋同様、分類をさらに複雑にしてしまう。なぜなら、他人と同一存在の者は誰一人いないからだ。限りなく細分化されるこの血液の差異は、純血で他と明確に区別された人種どころか、言うまでもなく、ある種の特徴を担った社会集団さえ構成するものではない。ほとんどすべての人間社会において、あらゆる血液の組み合わせがおそらく可能なのだ。それに血液以外にもいろいろある。ある優秀な眼科医の友人が教えてくれたところでは、人間の虹彩は非常に個別的なものだから、現在、その差異性が身分証明に利用可能か否かの研究が積極的になされているそうだ。声の利用がこの問題の電子工学的解明に道を開くことは周知の事実である。

われわれの最初の結論は無傷である。すなわち、地理的・社会的な完全な孤立が生物学的淘汰を行ったかもしれないというような例外的な仮定を除けば、人間の生物学的本質はたえざる混血を通じて形成されてきたし、現在も形成され続けている。パラドックスを弄さなくても、われわれはほとんど皆雑種なのだと言えよう。

第二の命題は第一の命題を根拠にしているから、第一の命題が確固なものでない以上、おのずと崩れてしまう。純血種概念が疑わしければ、純血の名の下の人種的優越性はもはや意味を持たなくなる。だが話を続けよう。彼らの論証が有効だと仮定した上で、いわゆる人種、純血と称する人種が、他よりも優れているかどうか考えてみよう。最後まで聞いてもらえなかったと人種差別主義者が嘆くことのないようにしよう。

さてここでも、われわれはふたたび当惑してしまう。事実がまたもや疑わしく、推論が首尾一貫していないからだ。なぜ「純血」種は「非純血」種よりも優れているのか。なぜ生物学的純粋が不純よりも優れているのか。生物学的優越性とは何を意味しているのか。これらすべてに納得のゆく答えがあるとして、ではなぜ生物学的優越性がその他の優越性をもたらすのか。

絶対的に純血ではなくても、一番均質的な人種が、歴史の偶然から、あるいは何らかの計画の結果、最も優遇されたことなど、何一つ示唆するものはない。運命あるいは神々に選ばれた名高い中小部族への言及が、集团的記憶の内に散見される。それは選民のテ

ーマであり、このテーマは、普通考えられているとは異なり、ユダヤ人特有のものではない。それに、このテーマは、ヘブライ人の場合も他の民族の場合も、単に生物学に還元されるものではない。フランス人は世界で一番機智まきちに富み、寛容な民族だと思いたがり、ドイツ人は一番徳が高く、イタリア人は一番芸術家肌で、ユダヤ人は一番神に親しい民族だと思いたがっている。いずれにせよ、その意味するところは同一で、自分たちが最も優れている、ということだ。生物学的要素が存在しているとしても、その意味するところは曖昧で、せいぜい象徴的なレベルにとどまり、しかもしばしば矛盾している。サムソン(注3)の髪の毛は雄々しさの徴、アキレスの踵かかとはもろさの徴である。

純血となるもつと疑わしい。英雄たちはしばしば混血、半神半人なのだ。必要とあらば動物の乳で育てられる。本当のところは、われわれは民衆の創造力の滋養分豊かな羊水の中にひたっているのだ。平凡な日常の日々と対立する栄光ある時代への郷愁……あるいは征服者に遅れて捧げられた賛辞。これは自分たちの無能力の一種の弁明でもある。それに自分自身の美化された姿を望まない者がいようか。こうした神話はすべて曇りもなく、その目的は明白だ。過去は未来を保証する。われわれは偉大だった。どうしてまたいつの日かそうならないことがあるう。それに価するようになればよいのだ。メシアの到来、あるいは再来はわれわれの高潔な努力次第だ。ここで生物学に割り当てられた場所が生まれる。われわれの再建、これをまず、われわれは肉体の鍛練から始めるだろう。精神はその後に続いて来るだろう。どんな疲労とも無縁で、どんな大胆なこともできる身長二メートルのたくましい男たちを組織的に養成することもできるだろう。さらに、彼らに羽飾りつきのボンネット、あるいは煙突のように高い軍帽を被らせれば、どれほど堂々とした軍隊を好きな数だけ持てることか！ この恐るべき不敗の歩兵隊、親衛隊、民兵、番兵、近衛兵、空挺隊くうていの特殊部隊を夢見なかった征服者、政治家がいただろうか。彼らのおかげで自分たちの法律を押しつけることが可能なのだ。ナチはこの政治的・軍事的夢想を再現したにすぎない。ナチの先駆者たちは生物学的操作技術を持ち合わせていなかったから、ありきたりなことだが、市場に出向いた。そして一番目立つ男、一番魅力的な女を買い入れ、採用したのだ。ナチは適切な生物学的手段をやつと所有したと確信して、本当の種馬牧場を作ろうと企てた。男女両性の選ばれた被験者、乳幼児の特別な養育、適切な教育・調教である。実験から結論は出なかった。公平に言うなら、実験期間が短かったと付け加えるべきだろう。幻影は死んでないようだ。最新技術を用いて、寸法通りの、同一で無限に増やせる個人、要するに完璧なコピーの製造がふたたび話題になっている。同質性、純粋性への妄想が続く。だが反論は変わらない。なぜ、管理と純化の遺伝学で生まれた生物学的に相似の存在が優れているのか。それに

そもそも、どんな優秀性なのか。仕事によっては生物工学の人造人間が多効率的だろう。だがわれわれはどんな効率を求めているのか。専門化した、しかも優れたロボットを望んでいるのか。あるいは、どこかにもろさはあるにせよ、もつと人間らしい人間を望むのか。男や女の理想像は肉体的強さなのかあるいは知的鋭さなのか。感受性なのか機能性なのか。

もつとも、こうした実験者たちが出現するずっと以前に、自然がすでに答えを出している。人類の歴史——そこで繰り広げられる暴力、暴行、混交の高まり、不可避の相互浸透——から離れて生きた人々は、この隔離の恩恵に浴するどころか、日の当たらない植物のように弱り、硬化化した。一八世紀ユートピア主義者お好みの神話である善良な野蛮人は、生物学的にも文化的にも、集団の遺産に何かより良いものを提供したかとなると、その答えはまったく否である。都会の混交から最も守られている農民が、都会人よりも、病気の抵抗力が弱いことが知られている。族内婚は健康の証明書では決してなかった。強靱な、文化的に幾世紀にもわたって栄えてきたユダヤ民族の例が引き合いに出されるかもしれない。だがこれはたいいていの場合うわべの族内婚なのだ。ユダヤ人を救ったのは、よく言われる彼らの孤立ではない。そうではなく、逆説なことだが、彼らの動乱の歴史は、彼らをこの地上でもつとも混血した民族の一つに仕立てたのだ。ユダヤ人すべてに共通する固有の解剖学的特徴など何一つない。混血の国民であるアメリカ人は、子供たちの美しさ、学者の創造性、技術者や事業家の手腕の上で、誰にも劣らない。ところがこの点においても、人種差別主義者の手口が狙っている方向は明白だ。われわれの優秀性を保護するためにも外国人による汚染から身を守ろう、ということだ。だがここでもまた、用いられている諸概念は表面的に明白であるにすぎない。生物学的優越性という観念がそうだ。これはたくましさ^と健康を意味するのだろうか。無駄のない身のこなしと器用さだろうか。優雅さと魅力だろうか。仮に生物学的優越性がそれ自体存在しているとしても、この優越性が心理的、精神的な何か別の絶大な力に姿を変えると、何も証明していない。健康も美も、絢爛豪華な引き裾模様のように、知性、高貴な感情、芸術的才能、気高い精神性を自動的に引き連れるものではない。もし筋肉や魅惑が集団的諸問題の最良の指導を保証してくれるものであったなら、国家の最高の指導者にスポーツマンや美の女王をもつと頻繁に戴いたであろう。運動選手があまり知りでないと逆に主張するつもりはないが——それはまた別の排斥となろう——、いずれにせよ、逆相関関係も認められるものではない。学者や神秘家や審美家の描く自我像が、か弱く、肉体に無関心に見えるのは残念なことだ。だがこれはまた別の議論である。心理的優越性もまた、与えられた目標に適合するためのより良い機能であろう。だがここにも多様な優越性がある。仮に生物学が何らかの役割を果たしているとしても、それは

複雑な方程式の一要素にすぎず、しかも、それが最も決定的な要素だとは、何も証明しない。どの方向から見ても、生物学的人種差別主義が支持できないのは明らかだ。自分の大義の正しさを執拗しつように証明しようとして、人種差別主義者がしばしばその戦闘領域を変えるのは理解できる。この領域拡大は一種の逃避なのだ。生物学から心理学へ、つい別の次元へと移行しても、人種差別主義者の分がよくなるわけではない。

最後に、第三番目の範疇の論拠が残るが、これもまた粉々に崩れざるをえないだろう。なぜなら、この論拠は先の論拠に依拠しており、これは検討の結果雲霧消したのだから。純血種が疑わしいもので、生物学的優越性が明白でない以上、ここから他の優越性を引き出すことはできない。だが、先と同様に、すべてを一応容認しよう……だが直ちに、事柄は一步も前進しないことがわかる。相変わらず風で移動する砂漠の砂だ。なぜ肉体的、あるいは心理的なる構造が社会的利益に価すべきものなのか。なぜ自然の優越性が、それがどんな種類のものであれ、特別の恩典を得る権利を与えるのか。

たしかにそのように決めることはできるし、時には、事柄は実際そのように進行する。人によっては逞たくましき、若さ、あるいは美しさを評価する向きもある。だがこれは事実問題だ。ところが、人種差別主義者は権利問題の話をするので。権力、名声、金銭をめぐる争いにおいて、肉体的外貌はかならずしも中立的ではない。その他の男性的武器を滅多に使用しない女性はこのことをよく承知している。ある種の中小部族では、動物に倣って、最も筋骨たくましい、あるいは最も足が速い、あるいはなにか目立った肉体的特徴を持つ男から族長を選ぶ。思いがけない仕方だ、テレビがこの古めかしい流儀を継承した。これからは、肉体的魅力と性の要素が、政治的説得に際して、勘定に入れられる。斜視で猫背の候補者は当選の機会が多分少ないだろう。だがそれは、規則でも必然性でもなく、ましてや倫理的至上命令ではない。今世紀初頭の映画を見直して驚くのは、スクリーン上を滑稽に動き回っている太鼓腹だったり、脂ぎってむくんでいたり、あるいはひ弱そうに見える政治家連の肉体的醜さだ。生物学的論拠というものが一般に口実にすぎず、解釈を逆転すべきことに気づくには、大した歴史的知識を必要とはしない。若干の王侯貴族の家系では、自分たちの支配的地位を生物学的独自性から説明する。彼らは自分たちの職務を占有するため、自然と天によって指名されたと言うのだ。ここで誰の目にも明らかなのは、まず特権を正当化し、ついで自然の、あるいは、天の保証に助けを求めているということである。何と多数の王朝の創始者が山師、陰謀家の大臣、あるいは一介の山賊にすぎなかったことだろう。何と多数の帝国が、その起源を、篡奪者さんだつ（注4）の反乱に負うていることだろう。本当に、生物学は良い口実を与えてくれる。まったく強固な口実だ。歴史的な論拠に欠け、道徳的な論拠にはさらに一層欠けている以上、生物学は目に見え、「自然で」あるから、信頼できる、疑問の余地のない基盤と見

えるのだ。

その証拠に、生物学的区別が実際ない場合には、それをでっちあげてしまう。貴族の血は青いとされ、フランスの国王は瘰癧るいれき(注5)を治すとの評判がたてられた。赤毛や白子は民衆を導くよう定められた、種族の最良の代表者であると決めることだつてできたらう。こうした特徴は少なくともごくはつきりしている。しかしながら、赤茶色から何か特別な心理が生まれるとか、この色素沈着が目に見えない黄金の後光を伴っているとか、ある例外的な魂の存在を意味しているとか、高貴な運命を指示しているとかとは、今まで誰一人積極的に主張した者はいなかった。

この作り話から記憶にとどめるべきものは何もないだろうか。そんなことはない。能力の問題が残る。民衆が最強者に身を託そうと願ひ、物質的財やもつと上品な贈り物で彼らに報いることは疑いない事実だ。だが人種差別主義者はまさしく逆のことを願う。つまり、榮譽や利益が生来ある特定の者たちに属し、この者たちが自分で自分を最高の存在だと宣言することだ。人種差別主義者は特権享受者の中のチャンピオンだが、生物学的あるいは精神的な何らかの定義により、アプリアオリに特権を享受している。だが能力というものは超時間的・抽象的な形で与えられるものではない。なかんづく、生物学的な形はとらない。ハンニバルは片目だった。ユリウス・カエサルは癩癩てんかんだった。ナポレオンは胃潰瘍で小男だった。三人とも知力は優れていた。だが、民衆を威圧したのは彼らの潜在的優越性ではなく、その優越性が集団の事業に役立つ形で実践化された点である。能力はそれなりの評価を受ける……。もしそうでなければ、まったくの特権と化してしまふ。

要約しよう。純血種も生物学的均質集団もまずは存在しない。仮に存在するとしても、生物学的に優秀だということにはならないはずだ。生物学的に優秀だとしても、だからといって必然的に高い能力が授けられていることにはならず、また、文化的に進歩しているわけでもない。仮にそうだとしても、より多く食べ、より快適に住み、よりよい条件で旅行をする不可侵の権利を持つことにはならない。たしかにそのように決定して、その決定を押しつけることもできよう。だがそんなことで、正義や平等が得るところは何もない。普通確認されるのは、まさにその逆の事態だ。発明家や独創的作家がいつも一番大切にされるわけではないのである。要するに、人種差別主義者の発言は、その根拠において確実性に欠け、その展開において一貫性に欠け、その結論において正当性に欠ける。

結局のところ、人種差別主義は過度の生物学信仰、打算的なエリート主義という姿を

とる。ところで、前者は科学的にまともに相手にできるしろものではなく、後者は科学の領域に属さない。

人種差別主義者の中には、個人の遺伝とか種の不変という生物学的永続性への思い込みがあるが、こうした説明に一番関心が深く、寛容な科学でさえ、この永続性を示唆する段になると慎重で、つねに部分的に留まる。生物学の役割は無視されるべきでも、過小評価されるべきでもない。しかし人間は両親の遺産の産物であると同様、当人固有の歴史の産物でもある。家族的環境、教育、文化的伝統、社会的状況、個人的・集団的事件、そして気候の影響まで視野に入れねばならない。これらすべてがあいまって個人の独自の容貌を生み出す。人間はこれら複雑なからみあいの産物であり、そこでは遺伝学的財産と最も広い意味での諸文化が協力しあっているのだ。前者のいわゆる純粋さとか、後者のみがつ因果関係というのは、誤った科学、あるいは欺瞞的イデオロギーに等しい空想にすぎない。

エリート主義というものは科学と何の関係もない。エリート主義が人間科学、生物学、心理学、社会学、歴史に基準を求めるのは、威厳と合理的保証を得ようとの配慮からだ。だが事実は、感情的な、あるいは、計算ずくの選択であり、ただそう認めないのは、信用を失う不安からである。エリート主義とは人間および人間関係にかんする一つの考え方、つまり、闘争を勧め、賛美し、最強者の勝利を願い、祝福する考え方である。それが敗者に敗北の不可避性を納得させる、有効な手段であることが理解されよう。人種差別主義は力に基づく宿命論を目指す。そこにはどう見ても、倫理的選択はない。

そうだ。人種差別主義者の言説には、理性的にも道德的にも、取り上げるべきものは本当に何一つない。

これで終わったのだろうか。そう信じたいし、また、そう確認してしかるべきかもしれない。だが先に述べたように、ことはまったく異なる。学者たちは、人種差別主義の仮説のもろさ、その野心の不当性を強調し、人種差別の無意味さを絶望的なまでに証明し続ける。反人種差別活動家は人種差別主義者の論拠を打ち破り、その断言の不正を暴くため、たえず見事な論法を数多く繰り出す。ところが決算は不気味なまでに期待外れなものだ。人種差別は消滅するどころか、かつてないほど活発であり、まるで根絶できなためしのない雑草のようだ。ある場所で枯れていつても、他の場所でまた生えてくる。諸科学と人々の熱意が束になってもどうしてこうも無力なのか。この挫折から二つの教訓を引き出すことができるように思われる。

学者や活動家たちは、一つの論理的推論と考えるものに、別の論理的推論を対置する。ところが、人種差別は単に理性の次元に属するものではない。その真の意味は外面的な

整合性にあるのではない。それは効果的であると同時に素朴な言説であり、その発生過程とその究極目的において、よそから指図を受け、根拠を与えられている。人種差別を理解するためには、この言説の向かう方角がどこで、また、どこで誕生したかを問うてみなければならぬ。ここからもまた、人種差別主義が理論ではなく、疑似理論である、ということになる。この呼称詐称とは手を切らねばならない。ここには明らかに、現実の体験を基に神話化し、合理化した像を作り上げようとする試みがある。

最後に、実践的な結論に入ろう。理論の欠如が明白なこのもくろみの論理的不整合性を暴き出すだけでは不十分だ。また、英知の影すらまったく認められないこの手口の哲学的野望を軽蔑するだけでも十分ではない。人種差別の形式主義的立論を反駁するだけでも十分ではない。人種差別の言説を支配し、その行動を指揮する感情と信念を明るみに引き出す必要がある。まず最初に、この体験を記述し、そこから生まれる知的メカニズムを取り出し、適切な行動の技術を確立しなければならない。

(注1) 現代フランスの作家、評論家。一九二〇年フランスの保護領であったチュニジアのチュニスで、ユダヤ人の父親とベルベル人の母親の家庭に生まれる。アルジェ大学、パリ大学で哲学を学ぶ。パリ第一〇大学で社会心理学を講じた。

(出典の著者紹介より)

(注2) 馬の品種の一つ。力が強く、馬車などのけん引に使役される。

(注3) 旧約聖書の士師記に登場する人物。怪力の持ち主とされる。

(注4) 王位や帝位などを奪った者。

(注5) 結核性の頸部リンパ節炎。

出典：アルベール・メンミ（菊地昌実・白井成雄訳）『人種差別』法政大学出版会、一九九六年、九―二六ページ。原著は、一九八二年出版。本文中の傍点は著者、「」内の補足は訳者による。出題にあたっては、一部改変した。また、注は出題者による。

文章② 人種をめぐる宗教と科学の関係史

滝澤克彦

あるエピソードから

「種」という概念の成立は、人間を総体として生物学的にとらえることを可能にした。一方で、その総体を「人種」という枠組みで分類する考え方を副次的にもたらした。これも、生命についての科学が大きな転換を迎える一七世紀の話である。以下では、この人種の問題に、宗教と科学がどのように関係してきたかを見ていくつもりである。そのため、最初に一つのエピソードをとりあげたい。

二〇二〇年一〇月二三日、世界最高峰の自動車レースで起きた接触事故の際、ドライバーが発した言葉が、物議をかもすこととなった。翌日、本件を速報したウェブサイトの記事には、このドライバーが怒りにまかせて接触相手に「放送禁止用語満載の暴言浴びせた」と記されている。その後の報道により、「放送禁止用語」の一つが「モンゴル」という言葉であることが明らかになった。事態を重く見たモンゴル政府は、レースの主催団体やドライバーの所属チームおよびスポンサー企業に対して抗議の書簡を送った。記事は、「人種差別的かつ軽蔑的な発言」が国際問題に発展しつつある、と報じている。

おそらく、日本の多くの人は、この事態の意味を理解できないだろう。なぜ、「モンゴル」という言葉が最初の報道で「放送禁止用語」と表現されたのか？そして、それがなぜ「人種差別的かつ軽蔑的な発言」となるのか？当然ながら、本来この語が放送禁止になる理由は何もない。それは民族や国の名前であり、モンゴルの人々にとっては、むしろ誇り高い響きをもつ言葉である。

しかし、ヨーロッパを中心とする西洋社会においては、この言葉には人をののしる際に付与される特別な意味がある。そこには、根深い人種差別問題が埋め込まれており、このドライバーの「誰かを怒らせるつもりはなかった」「瞬発的に思わず口から出てしまった」「言葉遣いが正しくなかった」という反省の弁は、凶らずもこのような言葉づかいが、暗黙的でありながらもいかに一般的なものであるかを明示するものとなってしまっている。

この問題の根底には、二重の差別意識が横たわっているが、その含意するものには、人種をめぐる宗教と科学のより複雑な歴史が関係している。

「人種」の発見

人間という存在を、何らかの違いによって分類しようとする発想自体は新しいものではない。しかし、それを生物学的なものとして識別しようとする試みは、一七世紀ころに初めて現れる。「人種 (race)」という概念の登場である。この概念は、フランスの医者であり旅行者であったフランソワ・ベルニエ（一六二〇―一六八八）によって、初めて学術的に提示された。ベルニエは、人間をヨーロッパ人、アフリカ人、アジア人、ラップ人に区別し、その分類を「人種」と名付けたのである。

この「発見」の背景には、ヨーロッパ人が世界へ進出する大航海時代の到来があった。彼らの実際の目を通して、世界の人々は「人間」という全体像のなかに、「人種」という区別を通して描かれることになったのである。また、それによって「人間」という存在の境界自体も、「怪物」などを含めた人間以外の存在（非存在）と明確に区別されるようになった。

人種にあたるものを、人間以外の生物を含めた生物学的枠組みの中で初めて定義したのは、分類学の父と呼ばれるカール・フォン・リンネ（一七〇七―一七七八）である。彼は、代表作である『自然の体系』の初版（一七三五）のなかで、動物界―四足綱―ヒト形目―ヒト属のなかに、四つの種を置き、それぞれ「白色ヨーロッパ人」「赤色アメリカ人」「黄色アジア人」「黒色アフリカ人」と名付けた。つまり、この時点で、彼は人種を「種」のレベルの違いであると考えていたのである。しかし、一七五八年の第一〇版では、大幅な修正を加え、ヒトを動物界―哺乳綱―霊長目―ヒト属に属する一つの「種」と捉え、その下に「亜種」として「野生人」「アメリカ人」「ヨーロッパ人」「アジア人」「アフリカ人」「畸形人^{きけい}」の六つを置いた。この修正は重要な意味をもつ。なぜなら、リンネも「種」を神が定めたものとして不変のものとしてとらえていたが、環境の影響などを受けて形成されるものとしての「亜種」を置くことによって、人間をその内部において「変化」するものとして捉える可能性が開かれたからである。

同時に彼は、「四足綱」―「哺乳綱」―「ヒト形目」―「霊長目」という名称変更を行っているが、これは宗教界の反発に配慮したものだ。他の動物からヒトを区別して上位に置こうとする人間観に対して、リンネは最高位のもを意味する名を与えて譲歩する一方、あくまで他の生物を含めた体系のなかにヒトを位置づけることには成功した。

人種観の変遷

亜種としての人種という捉え方は、その後、様々な研究者に受け継がれていく。例え

ば、人類学の父とも呼ばれるヨハン・F・ブルーメンバツハ(二七五二―一八四〇)は、『人間の自然的亜種について』(一七七五)において、人間は五つの亜種(コーカサス人、モンゴル人、エチオピア人、アメリカ人、マレー人)によつて構成されると論じている。それぞれの亜種の特徴は環境の影響を受けながら形成されるが、その原型はコーカサス人であり、他の人種はその変化(退化)したものであるとされる。ここで変化するものとしての亜種の分類が、説明原理としての力を発揮する。アメリカ人は、コーカサス人とモンゴル人の中間型、マレー人はコーカサス人とエチオピア人の中間型という具合である。現在では、原型にもっとも近いのはジョージア人であり、彼らの頭蓋骨の美しさと肌の白さがその根拠とされている。骨が判断基準となるのは、当時の解剖学のもつていた影響が反映されたものであると言えよう。コーカサスという場所については、旧約聖書の大洪水の際にノアの箱舟がたどり着いた場所とされるアララト山の存在も関係している。

一方、フランスの博物学者ジョルジュ・キュヴィエは、『動物の自然史の基本表』(一七九八)においてネグロイド、コーカソイド、モンゴロイドの三分類を唱え、後の人種観に大きな影響を与えた。

この分類は、聖書の影響を強く受けている。それは、人類はすべて大洪水の生き残りであるノアの子孫であり、アジア、アフリカ、ヨーロッパの人種は、それぞれノアの三人の息子セム、ハム、ヤペテを始祖とするという考え方である。実は、このような解釈はすでに五世紀のアウグスティヌスによつてなされていた。しかし、アウグスティヌスは、このような系統による区別は、宗教の区別に比べればはるかに些細なものであると考えていた。彼はその主著『神の国』において「どこの場所であれ、人間として、すなわち理性的で死すべき生き物として生まれた者はだれでも、その者が身体の形態や肌の色、動きや声、何らかの力や部分や属性の性質においてわたしたちの感覚に異常なものとしてあらわれるとしても、あの一人の最初の人間に起源をもつものであるということに信仰ある人は疑ってはならない」と記している。

しかし、「人種」の科学は、アウグスティヌスとは別の方向へと進むことになる。キュヴィエは、その三分類をノアの息子たちに基づくものとしながら、アダムとイブがコーカソイドであったとの推測から、他の人種をその「退化」したものと考えたのである。

人種の科学と差別

このように「人種」の概念は、その当初からヨーロッパの主観と偏見に満ちたものであった。特に、人類のコーカソイド起源説とその優位性の根拠となった頭蓋骨と肌の色

の美しさという主観的な基準は、人種差別とも根深い関係をもつことになる。

人間という種の内部の分類をめぐって骨格が重視されたのは、当時の解剖学の発達を考慮すれば当然のことでもあった。生物学的な分類学においては、骨格こそが重要な指標となっていたからである。しかし、当時の生物学に芽生えつつあった唯物論的人間観(注1)は、亜種の分類をめぐる骨格と人格のあいだの関係性についても大きな関心を寄せるようになっていた。

例えば、解剖学の発展を背景に一九世紀前半に隆盛を迎えた「骨相学」という学問があった。その代表的論者であるドイツの解剖学者フランツ・ガル(一七五八―一八二八)は、脳はさまざまな精神活動に対応する複数の器官の集合体であり、その機能の違いが頭蓋の形状に表れると考えた。この着想の一部は、のちの脳科学の基礎となるものである。二足歩行の開始による頭蓋容量の増加が、人間の知能の発達をもたらしたと考えたダーウィンも、基本的にはその系譜に連なるといえるだろう。一方で、当時の骨相学の従事者たちは、頭蓋の形状と精神活動の関連性を前提としながら、人種間の知能をめぐる比較の方に関心を寄せるようになっていった。

アメリカの医師であったサミュエル・ジョージ・モートン(一七九九―一八五二)は、世界中の民族の頭蓋骨を収集し、測量することで、その知能を比較する「頭蓋計測学」なるものを確立した。それによって、白人がもつとも発達した知能をもち、黒人がもつとも低い知能をもつと主張しようとした。当然、現在では、このような見解も分析方法も、まったく根拠のないものであるとみなされている。そもその動機が、人種間に区別や優劣をつけようとするものだった。特に、宗教との関連で興味深いのは、モートンが骨格による差異を根拠として、神による創造が人種ごとに別々に行われたと主張したことである(多元発生説)。アウグステイヌス以来の全人類ノア起源説を否定したのである。

骨格と知能の関連を種のレベルで受け入れたダーウィンであったが、一方で彼の進化論は、これら骨相学に対して大きな打撃を与えるものだった。ダーウィンの進化論によれば、人類は最も近い類人猿から分かれたときのヒトを共通の祖先としてもつ「きょうだい」ということになる。ダーウィンは、人種の違いのように見えるものが実際は連続的であって、その間に明確な生物学的区別をつけることは不可能であると記している。彼自身は奴隷制反対論者であったとも言われている。彼の二人の祖父たちも奴隷制廃止運動の支援者だったが、その運動のシンボルとして配られたウェッジウッド社製のメダルには、ひざまずく黒人奴隷の姿と“Am I not a man or a brother?”という言葉が刻まれている。

ダーウィンの進化論に反対した科学者たちのなかには、骨相学の流れをくみ人種の多

元発生説を唱えるルイ・アガシー（一八〇七—一八七三）のような熱烈な人種差別主義者もいた。彼は、白人と黒人が同じ祖先をもつとみなし、しかも両者の生物学的な差異を極めて小さなものとするダーウィンの進化論を、どうしても受け入れることができなかったのである。

「コーカソイド」「モンゴロイド」「ネグロイド」という三分類は、キュヴィエが聖書の記述に依拠しながら名づけたものであることは先述のとおりである。この分類は、日本でもよく知られ、特に「モンゴロイド」という言葉は現在でも用いられるが、この語が西洋で「ダウン症」を指すものでもあったという事実は、あまり知られていない。かつて使われていた「蒙古症」（モンゴリズム）^{もうこ}という言葉を思い出す人はいるかもしれない。これらの用語法（モンゴリズム、モンゴロイド）の発端となったのは、イギリスの医師ジョン・ラングドン・ダウン（一八二八—一八九六）が、一八六六年に発表した論文である。彼は、ダウン症をその骨格的・外見的特徴からモンゴル系の人々に特有の「疾患」であると考えた。彼は人間は同一の起源をもつと考え、種の変化についても受け入れていた。その上で、白人種にこの疾患が表れるのは、より劣った人種への「退化」の兆候であると考えた。このような説は学界に定着することはなかったが、その言葉とそこに含まれる二重の差別意識は後の世代に受け継がれていった。「蒙古症」（モンゴリズム、モンゴロイド）という語は、一九六〇年代にモンゴル人民共和国政府の抗議を受け使われなくなり、代わりにその命名者の名をとった「ダウン症」が用いられるようになる。しかし、この文章の冒頭で触れたエピソードは、いまだにこの差別意識が根強く残っていることを図らずも明らかにしたのである。

（注1） ここでは、人間の意識や知性、感情などの精神活動が、自然界の物理的法則や秩序に還元してとらえられるとする考え方をさす。

出典：滝澤克彦「宗教とコスモロジー」（アブドウルラッハマン・ギウルベヤズ他編『多文化社会学解体新書——二世紀の人文・社会科学入門』松本工房、二〇二一年、三五—六一ページ）四一—六〇ページ。出題にあたっては、一部改変した。また、注は出題者による。